

## 第1回 館長講座

「発掘でめぐる世界—イラン・タイ・イタリア・日本—」

学生の時以来、遺跡の発掘調査を通じて人と出会い、外国の文化に触れてきた。発掘調査中はたいてい合宿しながらの生活で、人々との関わりもずいぶんあった。今年は私が体験してきた遺跡の発掘の成果と、発掘しながら生活していた現地のさまざまを紹介し、異文化との出会いについても考える場にできれば、と思います。

2回、3回はイラン、4回5回はタイ、6回から14回はイタリア、15回目は鹿児島県の指宿での調査を取り上げる。

初回は大学入学以来、これまでの発掘経験をお話ししながらそこで出会った方々とのつながりなど、をお話しします。

### 考古学を学んで

大学に入った年は、1968年、学生運動の真っ盛り 入学後2ヶ月で全学ストライキ、翌年1月まで教員による授業はなく、その後も変則的な日程の中で2年半を教養学部在籍、大学入学後3年目の10月、考古学文学部の専修課程に進学。

なぜ考古学か。小さいとき（小学校の頃？）から歴史は好きだった。家に古い戦前の歴史物語の本があって、読みあさっていた覚えがある。

高校に入ってから進路を考えたとき、好きなことを勉強していこうと思った。歴史好きのなかでも、日本国家の起源は、日本人の文化の元は？等考えるようになった。当時出た本に 井上光貞「日本国家の起源」（岩波新書） 騎馬民族説の数々、などがあつた。

でも日本文化は米づくりにかかわることから始まるのかな、とするとそれを受け入れる何かはその前の縄文時代にはあつたのかな、で縄文になった。

本格的な発掘体験は4年生の夏の考古学実習による常呂での発掘。

考古学を専門的に学んで1年半で卒業させられ、もっとやりたいな、と思って大学院に進学することにした。といっても4年生の時に就職活動など全くしなかったし、就職の勧誘は1社、会社名は忘れたが海運会社から「特定の学科の特定のあなたに送ります」という文面だけ覚えている。ただ教員免許だけは取っていて、万が一、にそなえていました。

### 1971年春 茨城県常陸太田市森東貝塚

森東貝塚は縄文前期諸磯式の時期。赤軍派の真岡銃砲店襲撃事件のあとで、同級生の車で移動していたのだが、普通の乗用車にルーフラックをつけ、そこに測量用の長い紅白のポールや箱尺などを積んでいたため、おまわりさんに呼び止められた、ということもあつた。この図がそのとき作成した遺跡周辺の測量図。

### 1971年8-9月 北海道常呂町(現北見市常呂町) 岐阜第3遺跡

大学の学年としては4年生の夏でしたが、3年生になったのが前年の10月で実習としての発掘には参加できなかった。

岐阜という遺跡名は小字で、岐阜県出身の方々が開いた村にちなんでいる。同様に栃木とか土佐という地名もあつた。ここで発掘したのは続縄文時代と擦文時代の竪穴住居址。

### 1972年2月 福岡県板付（水田）遺跡

考古学をやっていくならとにかく発掘経験を積まなければと思い、藤本助手に福岡市教育委員会で発掘調査をおこなっていた後藤直さんのところに行け、といわれた。福岡では、発掘もさることながら発掘に集まっていた人たちに圧倒されていた。全共闘崩れ、というか、学生運動をやっている大学に行かずアルバイトとして発掘に来ていた人たちとか、福岡県・福岡市の職員たちの夜ごとの研究会とか、ここで出会った人との関係が現在の私に大きく関わりを持つことにもなった。

板付にはこの年と翌年の2月にも出かけた。発掘現場は福岡空港のすぐそばで、弥生時代の水田など。昼間は発掘、夜は地域の当時若かった研究者たちとの研究家にも連れて行ってもらっていた。その人たちの会話の中で、よく「前期の土器が・・とか中期には・・・」などの言葉が出てくるのだが、私のそれまでの関東・東京での経験では普通は前期とか中期とかいうと縄紋時代のことをいっていたのだけれど。こちらでは弥生時代の話をしているのだと途中で気づき、風土、ということと大げさですが違いを感じた。

### 大学院1年目

大学院でもとにかく発掘経験を積むんだ、と意気込んでいた。板付けで会った立正大学の学生の荒木さん（当時）に誘われて早稲田実業の市毛勲さんを紹介してもらい、千葉県印旛郡の鶴塚古墳の発掘に参加させてもらった。大学院での指導教官は、縄紋土器を専門とする佐藤達夫先生、私自身の専門分野も縄紋土器としていたが、発掘できるなら縄紋でも古墳でも何でもよい、という思い。

周りが土取で削られ、このように古墳のある部分だけ残っている、そんなところの発掘調査。報告書の概報の表紙に載せましたが赤く塗られた埴輪が出土し、ほかに右のような弥生時代のおそらく棺として使われたのだらう壺をふたつ重ねた状態のものも出土した。出土遺物の整理には、当時早稲田大学の近くにあった早稲田実業に通う。

出土した縄紋土器がそれまでほとんど見られなかった変な?紋様だったので、佐藤達夫先生の指導を受けながら資料紹介として発表した。これが研究雑誌に発表した実質最初のもので、ですから、私は縄紋早期を専門とするものだ、という誤解?も特に埼玉県の人たちからはされていたことがあった。

### 1972年7-8月 船橋市八栄北遺跡

続いてこの年の夏にはこれも藤本助手から岡崎文喜先輩の現場を紹介してもらって船橋での発掘に参加。それまで運動とは無縁できたし（今も）体力的な自信はなかったのだが、真夏の当時よくでていた光化学スモッグ注意報の元で一夏を経験し、乗り切れたことでやっつけられる、という自信も持った。この現場で、当時の大学の写真室におられた鈴木昭夫さんとも仲良くなり、この出会いがイタリアへの道を開くことになる。ここは船橋市の小学校建設予定地で、上智大学の八幡一郎先生を調査団長とし、岡崎文喜さんが調査主任、その元に上智大学、早稲田大学、等の学生が参加していた。私が担当していたのは古墳時代の住居跡2軒、縄紋前期の2軒ずつ重なった住居址4軒。

#### 1972年8-9月 常呂町ライトコロ川口遺跡

船橋での発掘の後、常呂での実習に参加、大学に在籍している間毎年のようにところで1ヶ月あまりを過ごした。大学院の1年目で、1年下の学年がなかったので、初めて「後輩」ができた。右上は、その後輩と佐藤達夫先生。

#### 1972年9月 余市町 西崎山遺跡

常呂の帰り道に重松さんに言われて余市町の西崎山ストーンサークルの発掘。ここで北海道の縄紋後期の土器と巡り会っていた。

#### 1972年10月～1980年3月 市原市国分寺台発掘調査団

帰京してからは市原市の国分寺台の発掘調査団に誘われ参加。このとき佐藤先生に報告をしたとき、「アルバイトはいいけれど、あまり責任を持たされないように」と忠告された。

この調査団では縄紋の貝塚遺跡を掘ることに成り、論文や修士論文につながる資料を得られた。

#### 大学院2年目～学振研究員

市原市の国分寺台の発掘の傍ら、大学での実習や調査にも参加。1974年8-9月 常呂町ライトコロ川口遺跡、1975年春 文京区向ヶ岡貝塚、1975年8-9月 常呂町ライトコロ川口遺跡

#### 1976年春 文京区向ヶ岡貝塚

向ヶ岡貝塚は、佐藤先生との最後の発掘だった。

佐藤達夫先生は考古学に進んで初めてそのお名前を知った方で、一般にはあまり知名度は高くはなかった。しかし、学者というのはこういう方のことを言うのか、と思うような方だった。ご自身は、東洋史から考古学に変わり、東洋文化研究所の助手を務めた後しばらく浪人の時期があつて東京国立博物館に勤められた。この浪人の時の生活は大変だったようで、考古学への情熱と生活は両立しなかったのでしょうか、まことにひどい格好であちこち土器を求めて歩いておられたという話も聞いた。私が博士課程に入ってからのことでしたが、あるとき先生が、「鷹野君、霞を食べても生きて行かれますよ」とぽつんと言われたのを今でも強く覚えている。幸い私は霞を食べる時期を持つことなく生きてこられました。ああ、そういう生活を経てこられたのだな、と感じた次第。佐藤先生は1977年、脳腫瘍のため、51歳で亡くなりました。ヒトが死ぬと言うことはそのヒトの持っているもの全てが消滅する、ということそのとき改めて感じました。じつは私にとっては怖い存在だったのですが、亡くなってから、もっといろいろなことを教えてもらえばよかった、と本当に後悔しました。

向ヶ岡貝塚で出土した土器は弥生時代の名の元になった土器と同じ時期の土器。

#### 1976年6-7月 常呂町トコロチャシ南尾根遺跡

トコロチャシ南尾根遺跡 では、藤本さん、当時の飯島武次助手、現在東大教授の大貫君と、町のおばさんたちを作業員さんとして北海道の初夏を楽しみながら、縄紋後期の堅穴住居などを掘った。1週間ごとの休日に自然の花畑に出かけると毎週違う花が咲き誇ってい

るという季節だった。まだ自動車運転免許は持っていなかったので、もっぱら藤本さんを運転手としてあちこち出かけていた。翌年冬2月、雪と氷に覆われたところで一ヶ月あまり過ごし、真っ白な静寂の美しさ、つららから落ちる水の音に感ずる暖かさなど、感じながらだった。この整理の結果報告書をつくり、そして後期の土器に関する論文を出した。

#### 1978年6-10月 東京大学イラク・イラン学術調査団 イラン帝国(当時)ラメ・ザミン遺跡

初めての海外調査であるイランの発掘に出かけることとなった。実は海外調査はその前、76年に計画された渡辺仁教授によるラオスでの調査に参加することになって、言葉の勉強なども始めていたのだが、ラオスで政変があり、調査ができなくなっていた。東京大学イラク・イラン学術調査団には大学院の博士課程の学生がかり出されるのが恒例であった。この調査に行くために自動車の運転免許を取るようになった。なぜなら私には日本から運ぶ車、トヨタのランドクルーザーの名義人で担当となることになったからだ。免許を取って、練習のためと言うことで初心者マークをつけて東京の町を走り、さすがに周りの車がよけるのがわかった。イランのではいろいろなことを学んだがそれはまたの機会に。

#### 1979年3月大学院単位取得退学 4月日本学術振興会奨励研究員

イランに行っている間に友人に頼んで日本学術振興会の研究員の応募書類を出してもらい、首尾よく採用された。大学院退学後学術振興会の奨励研究員となって1年間で過ごした。研究員としての月給と、市原での調査員としての給料と、生涯で最も裕福な1年間だったかもしれない。

研究員という立場だったがまた夏は常呂に出かけ、栄浦第1遺跡で縄文時代のお墓を発掘。右はこの遺跡の竪穴住居址や墓壙やいろいろなピット(穴)の重なり合った状況の平面図。

#### 1980年4月 千葉県市原市教育委員会に就職

奨励研究員が終わり、行き場がなくなった特にちょうど市原市で発掘担当の職員を取ることになり、試験もなく職員として採用してくれた。今では考えられない公務員としての採用のされ方だろう。もらった辞令には「社会教育主事補」とあったが胸につける名札には「学芸員」と書いてある。教職は取ったが学芸員の資格は取っていない。資格がないけれど、と課長に言ったら、職名だからいいんだ、といわれそんなものかと。これが私と学芸員の出会いかな。非常勤の調査員としてかかわっていた間は西広貝塚、祇園原貝塚と縄文の遺跡だけを担当していたが、それらは一段落していたので、正職員となってからは後に史跡に指定されることになる上総国分尼寺の調査を先任の宮本敬一さんと一緒に担当することとなった。ここでひたすら土層図を作成することで日を送り、定年までこういう生活が続くのかな、と密かに思ったこともあった。

しかしこの間結婚。当時は当たり前だった仲人を関野雄東大名誉教授・当時お茶大教授に依頼。ついでに就職もお願い。関野先生がご自分の後任に推薦してくれた。

#### 1981年6月 お茶の水女子大学就職

1982年夏 市原市祇園原貝塚 1983年夏 市原市諏訪台遺跡 1984年夏 東京大学構内遺跡  
お茶大に採用された一つの理由が、学生の実習の面倒を見られるだろう、ということだったこともあり、実習として発掘調査を取り入れた。市原市では調査会の好意もあり、市内の旅館を安く提供してもらって、しかも調査の日当を出してもらって宿代に充てる、ということができ、2年間、合宿による調査をおこなった。人数が多かったので扱いが大変だった。でも女子学生を連れての大人数の合宿は、正直懲りた。そこで3年目は藤本さんに頼んで東大構内で通いの発掘を実施。

#### 1985年9-11月 イタリア・シチリア島ローマ時代別荘遺跡 第4次調査

イタリアの調査には、第2次調査から誘われていた。しかし2次調査の時は市原市の職員だったのでとうてい3ヶ月もの長期間の発掘にはでられず、また市にはそのような事をする制度もなかった。第3次の時はお茶大に勤めていたが専任講師でまだ大学内では見習いみたいなものだから、ということで行かない方がよい、というアドヴァイスがあり、断念。大学の教員といえども長期間公費で海外に出張するのは年に何人か、という時代で専任講師という立場でそういうことをするとやっかみを買うのでは、という心配をしてくれたようだった。85年には助教授となっていたので行けた。ちょうど1歳になったばかりの息子が3ヶ月の間で父親を忘れる、ということもあったが、ここでの話もいずれ。

#### 1988年夏 岩手県早坂平遺跡

当時の岩手県山形村、現在は久慈市にあった遺跡で先輩の安斉正人助手の手伝い。安斉さんはおととしまで東北芸術工科大学にお勤めだった。この当時日本最大とされた石刃を出土した遺跡で、お茶大の学生も参加し、報告書作成までかかわった

#### 1989年夏 岐阜県沢遺跡

沢遺跡は佐藤達夫先生との関係で知り合った千葉大学の岡本東三さんに誘われ、2週間だったか、岐阜県古川町（現飛騨市）で合宿しての発掘。ヒレ酒のうまさ、銭湯帰りの酒屋さんの店先での缶ビールが楽しかった

#### 1990年9-10月 タイ バン・ドン・ブロン遺跡

シチリアの調査のあと、青柳さんは次の調査地としてタルクィニアの調査許可を取った。この調査には私が現場監督のような形で参加することとなっていた。86年に、福岡市の方たちと遺跡の測量調査をおこなっていた。しかしそのときの行き違いですぐに発掘調査に取りかかれなかった。その間を埋める形で鹿児島大学の新田助教授、彼は大学の同級生で、仲良しだったが、手伝ってくれ、といわれてタイの調査に出かけた。製鉄遺構を目指したが下層から墓地にあたってしまった。

#### イタリアでの調査

#### 1992年夏～ タルクィニア・ローマ時代別荘遺跡(～2002年)

Villa Romana a Cazzanello で、略称をVRCとし、発掘開始。最初の3年間は文字通り現場監督で、発掘指揮も生活管理もみんな担った。最初の年、帰りの飛行機がロンドン乗り継ぎだったが、当時はロンドンのヒースロー空港は荷物の扱いの評判が悪く、私の荷物

の出を待っても来ず長時間待たされたあげく行方不明となり、最後に出口から現れたところ、息子が飛びついてきて顔を伏せるシーンがあり、当時独身だった仲間たちから「先生いいなー」とうらやましがられたりあきれられたり。4年目から現場の指揮は東北大学を出られて大阪の文化財センターに勤めておられた松山聡さんにゆだねることになり松山さんは大阪を退職して東大の助手となってその後ずっと青柳さんの調査を担ってきている。

92年から始めたタルクイニアのローマ時代の別荘遺跡の3年間の成果がこの写真。クローバー型の部屋がきれいにでた。この写真を撮るためにクレーン車を借りてクレーンの上野ゴンドラの中からこれを見たとき、我ながらなんてきれいな建物を掘ったのだろう、と感心したことを覚えています。

2001年から青柳さんはヴェスヴィオ山北側のソンマ・ヴェスヴィアーナにあるアウグストゥスの別荘ではないかとされる建物跡の発掘に着手、その遂行のために2004年から科学研究費特定領域研究で「火山噴火罹災地の文化・自然活況の復元」と題するプロジェクトを始め、この遺跡がヴェスヴィオ山の噴火で埋没したと想定されたところからその日本版、つまり日本列島で火山噴火で埋没した遺跡の調査をおこなうことになった。ソンマの遺跡の発掘にはもうメンバーとはならず、年1回、調査状況を見に行く程度の関わり。

ソンマ・ヴェスヴィアーナの遺跡は、ナポリからヴェスヴィオ周遊鉄道に乗って30分くらいでしょうか、メルカートヴェッキオ（古市場）駅で降りて歩いて5分くらいのところ。ふだんはソンマの町の郊外にある宿舎から車で通います。右は遺跡付近から見たヴェスヴィオ山。ポンペイから見る山と違い、ヴェスヴィオの外輪山が見えています。ちなみに外輪山のことを英語でソンマといいます、ここにちなんでいます。

#### 2005年～2013年指宿市敷領遺跡

科学研究費特定領域研究「火山噴火罹災地の文化・自然環境の復元」は2004年度から始められたが、翌年から発掘対象地を指宿市敷領遺跡とした。指宿を選んだのは、発掘の手足（考古学専攻の学生）を持たない私にとって、鹿児島大の新田教授の協力を得られることも大きな理由である。はじめは鹿児島大、お茶大、東京工業大学の学生の参加によるものだったが、次第に大学の数が増え、鹿児島大、お茶大、明治大、東海大、鹿児島国際大学の学生が来てくれるようになった。

新田さんと私の共通する思いで、イランで経験したようなことを学生にはさせまい、ということ、生活する環境をしっかりと整えた上で発掘調査をしよう、ということがあった。参加した学生が皆また来たい、といってくれたことはその思いが功を奏した、といえるのだろう。私の大学勤務時代の最晩年の発掘が良好な人間関係の中で一定の成果があげられたことは「自分をほめてあげたい」くらいの思いである。左上は火山灰で埋もれた田んぼの畦をなんとか復旧しようとしていた当時の人々の仕事の跡、左下は最新の調査方法、発掘をせずに地中の状況を見ようとする地中レーダー探査の結果の図、右は調査を通じて成長してくれた学生がつくった発表用のポスター。彼は、松崎くんは東海大から郷里の鹿児島大学の大学院に進みそして指宿市に就職した。